

書 評

黄 武達 編著

『日治時期台湾都市発展地図集』

南天書局有限公司・国史館台湾文献館共刊、
2006年7月、地図155幅183枚、附冊2冊（導
読、地図目録・図録一覧）、NT\$24,000

本書は、日本の植民地時代¹⁾の台湾で作成された、都市計画図を中心に復刻されたものである。当時「市区計画」または「都市計画」の告示を受けた74都市の計画図の多くは、国史館台湾文献館収蔵の「台湾総督府公文類纂」附巻に収録されているが、これを中心に、不足分や未発掘のものを南天書局蔵や個人蔵で補った地図群である。収録されている都市〈現在の地名〉（収録件数）を挙げていくと以下の通りである。

基隆(5)・草山(陽明山)(1)・台北(10)・板橋(1)・瑞芳(1)・宜蘭(3)・羅東(2)・蘇澳(1)・桃園(1)・中壢(1)・大溪(2)・新竹(6)・竹東(1)・竹南(1)・頭份(1)・北埔(1)・後龍(1)・南庄(1)・苗栗(1)・公館(1)・通霄(1)・銅鑼(1)・苑裡(1)・大湖(1)・三義(1)・卓蘭(1)・大甲(1)・内埔(1)・清水(3)・神岡(1)・石岡(1)・東勢(1)・新高港(台中港)(1)・梧棲(1)・豊原(1)・沙鹿(1)・台中(11)・彰化(7)・鹿港(1)・員林(1)・草屯(1)・埔里(2)・北斗(1)・南投(2)・水里(1)・林圯埔(竹山)(1)・西螺(1)・虎尾(1)・斗六(1)・斗南(1)・北港(4)・嘉義(9)・朴子(3)・白河(1)・塩水(1)・新營(1)・学甲(1)・麻豆(1)・佳里(1)・善化(1)・台南(11)・旗山(1)・岡山(1)・高雄(8)・鳳山(1)・屏東(5)・東港(1)・媽宮(馬公)(2)・花蓮(3)・鯉魚尾(寿豊)(3)・鳳林(1)・玉里(1)・新港(成功)(1)・台東(2)

原図のほとんどは、手描きまたは、印刷された一般図に必要な情報を加筆して、主題図として作成された1点ものが多い。例えば、1922（大正11）年に刊行された「改正町名・台北市街図」は、加筆により「大正13年中台北市腸チフス発生図」へと加工されており、希少性とともに、有用

な情報の宝庫でもある。これらの図群を原図の色合いを再現しつつ、収納の便を考えて、60.5cm×43.5cm、または60.5cm×85.5cm（二つ折り）の料紙サイズに納まるように版を整えて復刻がなされている。このため、一部の図では料紙サイズに合わせた拡大・縮小が行われ、料紙サイズに納まらない場合は図を分割して、複数枚にわたるような復刻方法がとられているため図幅数と枚数の間に差が生じている。また、原図によっては、表裏2面にわたるものも存在するが、これも忠実に再現されている。

一番古い図で1899（明治32）年、最も新しい図で1943（昭和18）年と、日本による統治期（1895～1945年）をほぼ網羅する。一都市で複数枚の図が含まれる箇所では、例えば基隆のように1905年・1907年・1917年・1929年・1930年と、年次を追って都市発展過程や、その原初形態を復原可能である点において有用な地図群であろう。

さて、先に挙げた都市名一覧を見て、台湾の地理に明るければ、その所在地や日本統治期に果たした役割がわかるであろうが、台湾に関心を持たない人にとっては、見たこともないような地名が列挙されている。さすがに台北、台中、台南などは、周知の都市であろうし、桃園国際空港（旧中正国際空港）の所在する桃園、甲子園で活躍した嘉義農高の所在した嘉義や、集集地震の被災地として名が知られた水里なども、比較的馴染み深い地であるが、宜蘭、旗山、虎尾などは如何であろうか？

宜蘭は、宜蘭県の県政府所在地であるが、植民地時代には刑務所支所や、専売局出張所が置かれ、戦時中は特攻隊の出撃地の一つであった。旗山と虎尾は、いずれも製糖工場が置かれ賑わっていた都市であるが、現在では日本人観光客が訪れることは稀な地であろう。評者は近年、植民地時代の台湾について関心を持ち資料調査の傍ら、電気事業関連の事務所跡や発電・変電設備の旧跡、かつての郵便局所在地など、近代化遺産を無節操に探訪している。そこでいつも苦勞するのが、植民地時代に発行された良質な大縮尺図がないことである。上記の近代化遺産については、統計資料

や地誌書などによって、その所在情報は容易に抽出しうるものの、所在“地点”情報は判明しないことが多い。一部の都市では、1/6,000～1/10,000程度の実測図に加え、「大日本職業別明細図」や鳥瞰図が刊行されている。「大日本職業別明細図」は、柏書房から復刻²⁾され、鳥瞰図の類も比較的入手が容易になってきた³⁾。これらを用いて、先に挙げたような近代化遺産の所在地点を特定していけるものの、上記2種の図は、実測図ではないため基図としては使いがたい。さらに、多くの地域ではこれらの図もないため、『台湾堡図』⁴⁾か地形図に頼ることとなる。前者は1/20,000と、比較的大縮尺であるが、統治期の初期段階に測量がされているため、近代化が十分に進展していない状況を示すことも多く、地形図では1/50,000が中心となるため用をなさないことがほとんどである。

そこで本書の登場である。本書に収録される図は、その性格から大縮尺の実測図がほとんどで、一番縮尺の小さい図でも1/25,000の図が1点含まれるのみで、最大縮尺の「北港下水構造図」1/20のような図は例外としても、1/10,000以下の縮尺を有する図で構成されている。最も件数が多い縮尺は、1/6,000の41件、ついで1/3,000が34件、1/1,200が28件と、ミクロスケールの分析をするために十分な空間情報を提供してくれよう。公的な性格を有する図群であるため、公共性の高い地物はしっかりと描写されている点も、評者が行うような探訪の役に立ちそうである。例えば、先に挙げた宜蘭について、①「宜蘭街下水新開平面図(1913年・1/3,000)」・②「宜蘭市市区計画図(1932年・1/6,000)」・③「宜蘭街市区計画図(1937年・1/6,000)」および④「大日本職業別明細図 基隆/宜蘭/羅東/蘇澳(1929年・縮尺無)」の4点の地図(作成年・縮尺)が収録されている。

①図は、関心が地下埋設物の構築にあるため、建築物については総描され、具体的な地物について名称が判らないが、それでも「医院」、「宜蘭支監」、「宜蘭守備隊」などのいくつかの建物については判明する。

②・③は、いずれも同一の「宜蘭市市区計画図」を基図とし、①図では判らなかった測候所、電力会社、郵便局、公園、専売局、家畜市場、屠殺場、飛行場や鉄道駅など、日本統治期になり新

たに設置された諸地物のほか、旧来から存在する孔子廟なども描写され、その所在“地点”が判明する。②図と③図の関係は、②図は印刷により大量に作成されたものであり、これを基図として③図が1938(昭和13)年度中の施行箇所を明示すべく作成されたものと思われる。しかしながら、このように図をつぶさに点検していると、看過できない疑問が浮かび上がってくるのも事実である。附冊の目録では、②図について、1932(昭和7)年5月20日の宜蘭市市区計画の成案した日付を測量年として挙げているが、図中右下隅の「11.8.13改訂版」の注記が存在することから誤りであり、本来は1936(昭和11)年とすべきであろう。しかしながら、同時に「宜蘭街役場・10.12.4・BY.Y.KAN.」と、改訂版の作成日を遡る日付印が押されてもおり、図の来歴について、簿冊から切り離されてしまったが故に、判然としない部分も発生していることは致し方なき点であろうか？

④図は、商工地図としての性格から、①～③図では表出していなかった醤油工場・畳表工場などの工場や、各種商店が浮かび上がり、②図と突き合わせることで、正確な所在“地点”を復原することが出来る。

河野(2007)によると、柏書房版は国立国会図書館で所蔵する国内外の256枚中、197枚のみが復刻されており欠落も多く、また東京交通社による「既刊地一覧」リストに挙げられるものの、残存が未確認の図も多数あるという⁵⁾。本書中では、7件の「大日本職業別明細図」が収録され、内6件は柏書房版にも収録されるものの、④図は河野の刊行・所蔵目録中で、残存未確認とされる図であり貴重であろう。

評者は本図群を眺め、近代化遺産の旧跡を探訪するための資料として活用しようと、手ぐすね引いて長期休暇を楽しみにしているわけだが、このような利用方法は、もしかしたら編者の意図とは異なるのかも知れない。本来的には、台湾における植民都市計画の変遷、計画の施工前(清代)の原初形態の復原、実際に計画が施行された都市の成長・拡大過程の把握など、都市工学分野での利用が想定されているものと思われる。しかしながら、台湾の各地を歩いてみると、想像以上に統治期の建造物が残されていることに驚かされる。残

されているのは、何も旧総督府や旧高雄駅のような著名なものばかりでない。例を挙げれば、台北市内でも中正紀念堂の裏手（東側）一帯には、当時の住宅が、今なお現住物件として利用されているが、このようなケースは決して珍しくない。本書は、このような現地に残る、“名も無き”統治期の遺物について、来歴を探るツールとしても使えよう。台湾では2001年に週休二日制度が入れられレクリエーション熱が高まり、旅行・観光関連の出版物が相次いで刊行されている。その中には、この時代の日本による建造物のみを取り扱ったものなども含まれる⁹⁾。本書の刊行により、より多くの情報がもたらされることを望みたい。

最後に、本書の性格上やむなきことながら、市区計画・都市計画の公示がなされなかった地域については、収録の対象になっていない。また、「市区計画図」以外の大縮尺図についても同様である。例えば、台湾南部、墾丁国家公園の入り口に当たる恒春は、かつてパイナップルの缶詰工場が置かれ、恒春電気株式会社や測候所も存在していた。しかし、「市区計画」の対象とはならなかったため、本書の中には「大日本職業別明細図 屏東/旗山/鳳山/潮州/枋寮/東港/恒春」中に、他の6都市と同一面に小さくレイアウトされた図が含まれるのみである。このような情報すらない地域に比べればまだ恵まれているのではあるが、より詳細かつ精度の高い地図群が引き続き刊行されることを切望し、本評を終える。

追補

評者は、現地に赴いた際に刊行元の一つである南天書局で本書を直接購入し、船便で送付の手配をしてもらった。為替レートにもよるが1台湾ドル（NT\$）が3.6円程度であったと記憶する。図書目録を見ると、海外からの注文にも応えてくれるようであり、南天書局のHPから問い合わせも

可能である。また国内では、いくつかの書店・古書店で取扱があるようである。特定業者を利することが本評の目的ではないので、取扱書店名を挙げることは控えるが、興味のある方はインターネットで検索されることを勧める。

【注】

- 1) 現地では、この時代のことを指し示す言葉として、「日治期」のほか「日拠期」なども使われている。意味合いとしては後者の方が、よりネガティブであるようである。本評ではこの時代を指す言葉として、評書にならない統治期を用いる。
- 2) 台湾については、柏書房から『中国商工地図集成』として復刻されている。
- 3) 例えば、莊永明『台湾鳥瞰図－1930年台湾地誌絵集』、遠流出版事業、1996、239頁。
- 4) 臺灣総督府臨時臺灣土地調査局『臺灣堡圖』、遠流出版事業、1996（復刻、1898～1905年測図）。
- 5) 河野敬一「近代期における市街地図の刊行－東京交通社による「職業別明細図」の所在目録作成を通じて－」（研究代表者関戸明子『近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究（平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書）』、2007）45～61頁。
- 6) 片倉佳史著、姚巧梅訳『台灣日治時代遺跡』、玉山社、2002、143頁。（邦訳タイトル『台湾日本統治時代の歴史遺産を歩く』戎光祥出版）や、片倉佳史著、姚巧梅訳『台灣土地。日本表情－日治時代遺跡紀行－』、玉山社、2004、158頁。傅朝卿『日治時期台湾建築 1895-1945』、大地地理出版、1999、143頁など。

（天野宏司）